前人未到 9連覇!!

絶対女王

12大会連続決勝進出 通算10回目の学生日本一

OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第39号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

高松宮記念杯男子第65回・女子第58回全日本学生ハンドボール選手権大会は11月、愛知県で開催され、大阪体育大学ハンドボール部女子は男女を通じて史上最多の連続記録を更新する9大会連続（10回目）の優勝を果たした。

全日本学生ハンドボール選手権大会

本学女子は前年まで、全日本インカレ8連覇中で、楠本繁生監督が指揮を執って以降11大会連続で決勝に進出している絶対王者だ。初戦で国士舘大学に40―19で勝ち、2回戦の西南学院大学戦は多くのメンバーを起用して48―10の大勝だった。準決勝でも筑波大学に36―30と、試合の主導権を握り続け、12大会連続の決勝進出を決めた。

11月7日、決勝で、能力の高い選手をそろえ春と秋の関東連盟のリーグ戦を制した東海大学と対戦した。序盤は相手の勢いに押され一進一退の展開が続くも、日本代表にも選出されている岡田彩愛（体育4年）が試合をコントロールし、同じく日本代表として国際大会も豊富に経験する石川空（体育2年）を中心に前半終了間際で連続で得点し、17―13で試合を折り返した。

後半は下馬場燎（体育4年）を中心とした鍛えられたディフェンスで相手の攻撃を防ぎ、どこからでも点が取れる選手層の厚みをみせつけて34―22で東海大学を降して、前人未到の12大会連続決勝進出、9連覇、通算10回目の学生日本一を成し遂げ、大記録をまた一つ更新した。

石川空

岡田彩愛

決勝の後、日本代表監督も兼任する楠本繁生監督は「今年は新チームがスタートしてから日本代表としての活動もあり、日々の練習を指導できない期間も多くあったが、選手たちが自分たちで目標を見据えて考えながら怠らなかった成果が今日の集大成だと思う」と話した。

主将の岡田彩愛は「大阪体育大学ハンドボール部の偉大な先輩たちが築き上げてきた連覇記録をつながないといけない、とプレッシャーを感じていて、チームや自分を見失いそうになった時もあったけれど、このチームで最後まで勝つことができてよかった。ほっとしている」と安堵した顔で話した。

表彰では、岡田彩愛、石川空、下馬場燎、松浦未南（体育3年）が優秀選手賞、和田薫（体育3年）が特別賞、楠本繁生監督が優勝監督賞に輝いた。

楠本監督

ハンドボール部 男子

関西連覇も 全国の壁高く

関西学生ハンドボール秋季リーグ 全日本学生ハンドボール選手権大会

ハンドボール部男子は関西学生秋季リーグで春季に続き優勝。全日本学生選手権大会では1、2回戦で快勝したが、準々決勝で前年の決勝で敗れた中央大学の高さに屈した。

9～10月の関西学生秋季リーグは関西大学と引き分け、8勝1分け、勝ち点17で並んだが、得失点差で上回り、春季リーグに続いて優勝。前年の全日本インカレ決勝を経験したメンバーが多く残り、チームは優勝を強く意識して、11月に愛知県で開催されたインカレに乗り込んだ。

初戦は追いすがる立教大学を冷静にかわして40―34で勝利。2回戦は、前年に試合時間残り1秒で逆転勝ちした東海地区王者の中京大学戦と対戦した。強豪相手に一進一退の攻防が続いていたが、速攻と組織的な守備で下川真良監督が目指す「全員で守って走るハンドボール」を体現。山場となった試合で42―29と大差をつけ、準々決勝に進出した。

準々決勝の中央大学戦は昨年の決勝のリベンジに燃えた。ただ、その気合が高まりすぎたのか、先制点を上げるも相手の高さを活かした守備に抑え込まれて得点を奪えず、中央大学ペースで試合が進み、最大6点差をつけられる窮地に追い込まれる。GK・矢村裕斗（体育4年）のスーパーセーブで徐々に勢いに乗り、追いすがったものの前半を4点差で折り返した。

後半は相手に退場者が続き、大阪体育大学ペースになる場面もあり、何度も2点差まで迫ったものの及ばず、試合は31―34で終了。2年連続で中央大学に敗れた。

下川監督は「選手から勝ちたいという気持ちが強く伝わってきたが、冷静さを欠いてしまい前日の中京大学戦の良い流れを継続できなかった。非常にスピード感のある試合だったので、ベンチからの指示も判断が難しかった。選手を勝たせることができず、とても悔しい」と話した。

4年生はこの大会をもって引退。後輩たちに11回目の優勝という目標を引き継いだ。

前川大樹

荒瀬廉

矢村裕斗

藤田響

梶山瑞生

田代優樹

ハンドボール部 女子

5年連続4強ならず

日本ハンドボール選手権大会

9連覇を果たしたインカレから2か月後の1月。大阪体育大学は第74回日本ハンドボール選手権大会（女子の部）に挑んだが、2回戦で敗退した。

日本選手権は日本リーグ加盟11チームも出場する、ハンドボール最高峰の大会だ。本学は昨年までベスト4、準優勝、準優勝、ベスト4と4年連続で準決勝以上に進出。初優勝への期待がかかっていた。

1回戦はGlück（グリュック・四国ブロック・愛媛県）と対戦。前半は0―1から濵口まお（体育2年）、瀧石涼伽（体育4年）らで6連続得点を決めて主導権を握った。22分からも6連続得点し、前半を22―5で折り返し。後半も大差をつけて47―11で快勝した。

2回戦は日本リーグ勢のプレステージ・インターナショナル・アランマーレ（6日時点で日本リーグ4位）との対戦。アランマーレには2年連続で勝利していた。

しかし、楠本繁生監督は「学生に何度も負けられないとの勢いを相手から感じた」という。前半開始から、3連続でシュートを決められた。立ち上がりに押され、選手に焦りも生まれた。岡田彩愛主将（体育4年）は「前半の入りが悪くて、自分たちの流れに持っていけなかった」という。22分から7連続得点を許し、前半は7―16と9点差を付けられた。

ハーフタイムで「もう一度ディフェンスからやり直す。自分たちの守って走るハンドボールをやろう」と確認し、後半は出だしから3連続得点を挙げて反撃。後半18分に松浦未南（体育3年）の連続得点で4点差。しかし、「追い上げて自分たちの流れになってきた時にミスが出た。最後までくらいつけなかった」と岡田。試合の流れは再び相手に傾き、21―27で敗れた。

チームは2月に日本代表の石川空（体育2年）、吉野珊珠（体育2年）がひざを痛めるなどけがが相次いでいた。選手のコンディショニングも万全ではなく、納得のいく練習ができていないのが実情だった。

楠本監督は「準備不足の結果だ。しかし、インカレ9連覇も2回戦で敗れた経験も、うちにとっては大きな財産。3年生が2つの財産をいい方向に持っていくことを期待している」と話した。

福井すみれ

松浦未南

下馬場燎

立石恋菜

濵口まお

硬式野球部 男子

逆転優勝あと一歩

最優秀投手賞を初受賞した杉本壮志

阪神大学野球秋季リーグ

硬式野球部男子は9～10月に行われた阪神大学野球秋季リーグで6勝4敗とし、2位。終盤の4連勝で逆転優勝にのぞみをつないだが、あと一歩及ばなかった。

4位に終わった春季リーグでの課題は参加校ワースト、4・29だった防御率の底上げ。エース・杉本壮志（体育4年）に続く先発の台頭だった。

しかし、初戦の関西国際大学戦は杉本が体調不良で欠場し、2―5で黒星。2戦目も0―7でコールド負けし、不安な幕開けとなったが、流れを変えたのは、やはり杉本。3戦目の大阪電気通信大学戦で完封勝利（3―0）し、翌日も2回を好救援し、連勝した。

続く天理大学戦は連敗したが、神戸国際大学戦は雨で2戦目の間隔が空いたこともあり、杉本がいずれも先発し連勝。大阪産業大学との初戦も杉本が完投勝利した。翌日の最終戦は1年生の尾﨑元（体育）が8回2失点で先発初勝利。首位・天理大学の勝敗次第ではプレーオフに持ち込む展開に持ち込んだ。最終的には天理大学が勝ち優勝したが、終盤の4連勝は来季以降に期待を抱かせる内容だった。

杉本は4勝1敗でリーグ最優秀投手賞を初受賞。3年生以降は大黒柱として奮闘し、卒業後は社会人での野球継続を目指す。

また、尾﨑はアンダーからの粘り強い投球で急成長。来季は杉本が抜ける投手陣にあって期待の星となる。

野手陣も、新戦力が大いに台頭した。開幕時は控えだった三塁・高寺真生（体育3年）、一塁・弓埜祥太郎（体育2年）二塁・芝幸大（体育2年）、中堅・藤本天平（体育3年）らがレギュラーをつかみ、高寺は17打数11安打をマークした。

中野和彦監督は来季に向けて「杉本に代わる投の柱の整備が急務。3年生からの台頭を期待し、尾﨑は2番手として伸びていってもらいたい」と話している。

先発初勝利を挙げたサブマリン・尾﨑元

指名打者として2回目のベストナインを受賞した4番・森下瞭

好リードと勝負強い打撃でチームを引っ張った阿吹俊介

硬式野球部 女子

インカレ2連覇逃す

1年生ながら粘り強い投球が光る柏﨑咲和

全日本大学女子硬式野球選手権大会
全日本女子硬式野球選手権大会

硬式野球部女子は8月に和歌山県田辺市などで行われた第12回全日本大学女子硬式野球選手権大会の準決勝で平成国際大学（埼玉県）に1―5で敗れ、インカレ2連覇を逃した。

全日本インカレでは、予選リーグで日本大学国際関係学部（静岡県）、桃山学院教育大学（大阪府）、環太平洋大学（岡山県）に3連勝。左川楓（体育3年）、柏﨑咲和（体育1年）、内田陽菜（体育2年）の継投で勝ち上がった。

準決勝は一回、3～5番の3連打で1点先取したが、先発・内田が二回に2失点。三回から柏﨑にスイッチしたが立ち上がりに3点を失い、打線も二回以降は無得点。横井光治監督は「相手はインカレ決勝でうちに敗れた昨年の雪辱をかけ、勢いがあった。相手の先発の極端に間合いが早いテンポに対応できなかった」と振り返った。

10月に松山市で行われた第18回全日本女子硬式野球選手権大会では4年生が抜け、3年生以下の新チームで出場。初戦は実業団のアサヒトラストから1回に5点を奪い、左川が完投して8―1で快勝。しかし、続くエイジェック戦では卒業生の大野七海に3安打を浴びるなど1―8で敗退。創部13年目で悲願のインカレ初優勝を遂げた昨年の勢いをつなげることはできなかった。

来季に巻き返しを期すが、左川、柏﨑、内田の投手陣はそのまま残り、横井監督は「これまでの経験を生かし、3人がゲームを作れば、頂点の奪回も狙える」と期待する。一方で4年生の1番三塁・東谷花鈴（体育）、3番一塁・中村華月（体育）、4番捕手・弓埜里桜（体育）の後をどう埋めるかが課題になる。

リードと勝負強い打撃で攻守の要の弓埜里桜

長打力十分の中村華月

トップバッターとして打線を引っ張る東谷花鈴

バレーボール部

次に繋がるプレー

関西大学バレーボール秋季リーグ
全日本バレーボール大学男子選手権大会

コーチ時代を含めて43年間チームの指揮を執り、3月で退官する浅井正仁監督のラストシーズン。関西大学リーグ戦は1部下位リーグで3勝2敗の3位（6チーム制）で閉幕。11月に東京で行われる第75回全日本バレーボール大学男子選手権大会（インカレ）に臨んだ。

インカレの1回戦は中京大学と対戦。中京大学とは前年の3回戦で対戦しベスト8進出を阻まれた。今季の西日本インカレでも敗れている相手だ。

試合は、地力に勝る相手に第1セットを18―25で落とし、第2セットでも18―25で連取される。後がなくなった第3セットも19―24と、相手のマッチポイントまで追い込まれたが、意地を見せて4連続ポイントで追い上げた。しかし、反撃もそれまで。セットカウント0―3でまたしても中京大学の壁を超えることができなかった。

浅井監督は「次に繋がるよう、競争心をもたせるように配慮し、インカレ最終試合では、体大らしい闘志あふれるプレーを発揮してくれた。体大らしい強く、明るく、愛されるチームとして成長してもらいたい」と話した。

出水充希

江口喬太郎

榮温輝

バレーボール部

復帰まであと一歩

関西大学女子バレーボール秋季リーグ

バレーボール部女子は関西大学秋季リーグ2部で2位となり入れ替え戦に進出したが、2019年秋以来となる1部復帰はあと一歩で果たせなかった。

開幕戦の佛教大学戦は3―0でストレート勝ちし白星発進。続く流通科学大学戦を3―0で勝ち、セットを落とすことなく連勝で幸先のいいスタートを切った。

第3戦は強豪の関西学院大学と激闘に。1セット目から30―32とデュースが続く競り合いに。フルセットの末、2―3で初黒星を喫した。

しかし、下を向くことなく勝ち星を重ね、リーグ最終戦の芦屋大学戦では粘る相手を寄せ付けず、第3セットでデュースが延々と続く接戦となるも35―33。3―0で勝利し、5勝2敗でリーグ2位となった。

京都橘大学との入れ替え戦は0―3で敗れ、3年ぶりの1部昇格は果たせなかった。それでも、長江晃生監督は「グループからチームになりつつある。確実にチーム全体として向上してきている」と前向きに話す。来季の悲願達成に向けて、光明も見えたリーグ戦だった。

船田璃々香（右端）

山口綾乃

権藤真実

＝写真はいずれも関西学生（和田のみ日本インカレ）

インカレ3人表彰台

陸上競技部

男子砲丸投げ大会新記録で優勝した下浦大輝

日本学生陸上競技対校選手権大会
関西学生陸上競技種目別選手権大会兼関西学生混成選手権大会
西日本学生陸上競技対校選手権大会

陸上競技部の女子アスリートがインカレの大舞台で躍進し、表彰台に立った。

日本学生陸上競技対校選手権大会の開催を2カ月後に控えた7月、愛媛県で開催された第75回西日本学生陸上競技対校選手権大会で、男子は400㍍で岩﨑拓生（体育1年）が47秒57でルーキーながら優勝、十種競技で成松遼（体育4年）が6916点で優勝した。女子では走り高跳びで森岡未優（体育2年）が1㍍71で3位までの選手と記録が並ぶも、試技数の少なさで競り勝ち優勝。和田真琉（体育4年）が1㍍71で3位となり、3種目で1位、9選手が3位以内に入り、インカレに弾みをつけた。

そして、9月に京都市のたけびしスタジアム京都であった全日本インカレ。全国の強豪を相手に、走り高跳びで和田真琉が1㍍76をマークし2位。800㍍で原華澄（体育3年）が2分7秒76で3位、円盤投げで中瀬綺音（体育3年）が46㍍92で3位となり、表彰台に立った。走り高跳びで2位に入った和田は「優勝が4年間の目標だったので悔しいが、自己ベストで2位になることができて素直にうれしい。たくさんの方々に感謝したい」と話した。

翌10月に大阪市のヤンマーフィールド長居で開催された関西学生陸上競技種目別選手権兼混成選手権大会では、男子ハンマー投げの表彰台独占をはじめ、投てき種目を中心に優勝ラッシュとなった。男子ハンマー投げは優勝の森下海（体育3年）が59㍍86、2位の吉田明大（博士前期課程1年）が59㍍32、3位の蔭山崚賀（体育4年）が57㍍48。やり投げで末次仁志（体育4年）が70㍍47で優勝、秦康太（体育4年）が70㍍27で2位に入った。砲丸投げで、下浦大輝（博士前期課程1年）が大会新記録の15㍍40で優勝、黒田翔貴（体育3年）が14㍍54で2位。女子では円盤投げで中瀬綺音が46㍍44の大会新記録で優勝、砲丸投げで山本佳奈（体育3年）が13㍍74で優勝、岩本真波（体育3年）が13㍍21で2位となった。インカレの走り高跳びで2位となった和田真琉は七種競技で4844点を獲得し、優勝した。

女子円盤投げ大会新記録で優勝の中瀬綺音

女子砲丸投げ2位の岩本真波

女子走り高跳び優勝の和田真琉

男子やり投げ優勝の末次仁志（右）、2位の秦康太

男子ハンマー投げ優勝の森下海、2位の吉田明大、3位の蔭山崚賀

男女5人表彰台

水上競技部

400㍍個人メドレーで優勝した枡井萌（写真右）と2位の山村莉子

関西学生選手権水泳競技大会

水上競技部男子は、7月に大阪市の丸善インテック大阪プールで行われた第96回関西学生選手権水泳競技大会に、40名を超える部員から選出された21名の選手が出場。結果は昨年の3位から二つ順位を下げ、男子総合4位となった。

新型コロナウイルス感染症の影響で、心身ともに満足のいく準備を整えることができず厳しい戦いとなった。200㍍背泳ぎで辻本瑞樹（体育2年）が2分5秒48、200㍍個人メドレーで森海斗（体育4年）が2分8秒02、4×100㍍フリーリレーで第1泳者の友田和志（体育2年）が52秒11でそれぞれ個人ベストタイムを更新した。しかし、表彰台に上がったのは、100㍍平泳ぎで1分2秒10のタイムで3位となった森圭佑（体育4年）1人だった。男子の尾関一将監督は「多くの棄権者がでたものの、男子総合4位を獲得できたことを誇りに思う」と話した。

一方、女子は50㍍自由形で河岸凜子（体育4年）、400㍍個人メドレーで枡井萌（体育2年）が優勝。4種目で表彰台に上がった。

400㍍個人メドレーでは枡井が4分56秒19で優勝、山村莉子（体育2年）が4分59秒20で2位。50㍍自由形で河岸が26秒51で優勝、新山くるみ（体育4年）が26秒73で3位。200㍍個人メドレーで青山美咲（体育3年）が2分20秒88で3位。全員がそれぞれの種目で表彰台にあがった強力なメンバーで挑んだ4×100㍍フリーリレーで河岸、新山、青山、山村が3分52秒33で3位に入賞した。女子総合は4位。女子の浜上洋平監督は「しっかりと力を発揮してくれた。来年に向けてさらに個々の能力を引き上げ、強豪大学に挑みたい」と話した。

400㍍フリーリレーメンバーの左から新山、河岸、山村、青山

100㍍平泳ぎ3位の森圭佑

サッカー部

悔しい5位フィニッシュ
新人の成長など好材料も

古山兼悟

11月20日、第100回関西学生サッカーリーグのトリを飾る大阪体育大学と関西学院大学との最終戦が大阪市のヤンマーフィールド長居で行われた。

関西学生サッカーリーグ

男子　3年ぶりの有観客試合で、会場は観客や各大学の選手で埋まり、関心は大阪体育大学が関西学院大学を破りインカレ出場を決めるかどうかに集まっていた。関西学生リーグから全日本大学選手権への出場権は上位4チームに与えられる。リーグ屈指の得点力を誇る関西学院大学はすでに優勝を決め、対して大阪体育大学の最終戦前順位は5位。最終戦での勝利が4位の関西大学を抜きインカレ出場権を獲得できる条件だった。全国の舞台にチャレンジするための大一番の試合に挑んだ。

試合は早い時間に動いた。前半10分、各校のストライカーを抑えてリーグ得点ランキングを独走する古山兼悟（体育2年）がゴール前の混戦から一瞬の隙を見逃さず、迷いのないシュートで先制点。しかし、勢いに乗り優勢に試合を進めるも追加点が生まれず、前半20分にペナルティエリア外からのロングシュートを決められ同点、前半アディショナルタイムにはコーナーキックからのヘディングシュートで逆転を許し前半が終了。

後半はJ2レノファ山口FCに内定し、アシストランキングで3位につける野寄和哉（体育4年）がゲームメイクからチャンスを作り再三ゴールに迫るも追いつくことができず試合終了。リーグ戦の順位が5位に確定しインカレ出場と王座奪還は来シーズンに持ち越された。

強豪として常に勝利を求められるチームにとって悔しい結果となったが、古山がブレイクし、19ゴールで得点王、佐野竜貴（体育1年）が新人賞を獲得するまでに成長を遂げたのは来年に向けて明るい材料だ。

野寄和哉

河村匠

関西秋季リーグ制覇 インカレベスト8

関西学生女子サッカー秋季リーグ 全日本大学女子サッカー選手権大会

高い得点力を持つ選手をそろえ、組織的な守備を併せ持つサッカー部女子。関西学生女子リーグは春季に続き秋季も総合力で制した。

宮本春花

女子　大阪体育大学は、第1節の追手門大学戦を1―0で制し、武庫川女子大学戦では背番号10を背負う宮本春花（体育4年）のハットトリックをはじめ攻撃力が爆発し、7―1で快勝した。

2位で迎えたリーグ最終節の明治国際医療大学戦。相手は負けなしで最終節を迎え、引き分け以上で優勝。大阪体育大学は引き分け以下では得失点差で3位になる可能性もあった。第31回全日本大学女子サッカー選手権大会には4位までのチームが出場できるが、シード権は1位のみ。今季はチーム発足時から関西第1代表としてシード権を持って全国で勝ち上がる目標を掲げていた。

石居亘子監督や選手たちは1点を争うロースコアの競り合いを予想していたが、自慢の攻撃陣が3点を奪い、チーム一丸で守って3―0で完封。6勝1敗の勝ち点18で秋季リーグ優勝を決めた。石居監督は「リーグ途中で負けがついても崩れることなく、昨年からチームとしてステップアップできた」と振り返った。

そして迎えたインカレ。シード校として2回戦から登場し、12月26日の初戦は四国大学に2―0で快勝した。しかし準々決勝では、関東3位の山梨学院大学に先制を許し、追いかけるも追加点を奪われ、0―3で敗戦。ベスト8で大会を終えた。石居監督は「失点した時間が早かったので、守り抜いて攻めるというゲームプランが崩れ、選手たちに焦りが出た。点差ほどの差はなかったが、結果は現実。キャプテンを中心によくまとまっていたチームだっただけに悔しい。3回生が戦力として多く残る来シーズンは今季の学びを新チームに生かしてほしい」と話した。

樋口佳那子

栂菜々笑

硬式テニス部

リーグ戦2部復帰

女子　硬式テニス部女子は関西大学対抗リーグ3部で優勝し、入れ替え戦も快勝。来季は悲願の1部復帰を目指す。

8月の全日本インカレはダブルスで前田明音（体育3年）・海津美空（体育2年）組が攻撃的なスタイルで本戦に出場。シングルスも岡井志織（体育4年）が予選に進み、決勝で本戦進出を逃したが、粘りのテニスが光った。

9月のリーグ戦は5戦全勝（不戦勝1を含む）。戦ったシングルス、ダブルス計20試合中19勝と圧倒した。神戸親和女子大学との入れ替え戦は、ダブルスで前田・海津組、岡井・上野胡桃（体育4年）組が勝利。シングルスでも海津が勝利した。

リーグ戦はコロナ禍の中断をはさみ3年ぶりの開催。3年前は3部で優勝したが入れ替え戦で敗れ、待ちかねた2部復帰となった。

岡村修平監督は「来季の目標は長らく遠ざかっていた1部復帰とインカレでのシングルス16強、ダブルス8強。一方で部員全体が底上げし、1人でも多く関西学生春季トーナメントなどで予選を突破してほしい」と話す。

インカレ初戦突破

男子　硬式テニス部男子は、8月の全日本インカレのシングルスで北昇馬（体育2年）が本戦で鹿屋体育大学の選手を6―3、6―3で降し、1回戦を突破。安藤百次郎（体育3年）も予選に進出した。

北は体格に恵まれ、ボールにパワーがあり、強豪選手にも力で負けない。ゲームセンスにも優れ、関西学生春季トーナメントを勝ち進んで、インカレ出場を果たした。安藤は元々、ダブルスプレーヤーで粘り強く、細かなテクニックもある。

2人以外も、インカレに出場しない選手が参加する8月の関西チャレンジトーナメントのシングルスで池畠大生（体育3年）、垣内勇星（体育1年）がともに4強。10～11月の関西学生地域トーナメントでは、ダブルスで北・黒田大洋（体育2年）組が優勝。シングルスでは池畠が4強、寺崎呼人（体育1年）が8強に進出した。

宮地弘太郎監督は「今季、個人戦はある程度結果を出せた。来季は、インカレで今年出場を逃したダブルスも含め、16強、8強に進む選手を出したい」と話す。

剣道部

関西連覇あと一歩

関西女子学生剣道優勝大会／全日本女子学生剣道優勝大会

剣道部女子は9月の第46回関西女子学生剣道優勝大会で準優勝した。昨年に続く連覇は果たせなかったが、絶対的なエースが卒業して迎えた今季、選手は健闘した。

湯川愛梨

堀田美恵

女子 昨年、個人戦の関西女子学生選手権大会で優勝するなど1年生から主力だった本田和が卒業した。今季は飛びぬけた実績のある選手はいない。「総力戦で勝ち抜く」がチームのテーマだった。

試合は初戦の2回戦、3回戦は順当に勝ち、関西大学との準々決勝は2−2で代表者戦に。ここから堀田美恵（体育3年）の獅子奮迅の働きが始まった。代表者戦で小手を決めて勝利。京都産業大学との準決勝はまたも代表者戦となり、堀が勝利し、決勝へ進出した。

堀は本田に比べて派手さのない選手。しかし、那須恵美監督は「愚直に正統派の剣道に取り組んできた成果が出た」と評価する。

しかし、決勝の同志社大学戦では湯川愛梨（体育2年）、早川愛菜（体育3年）が引き分けたが、2敗して堀の大将戦の前に勝敗は決し、堀も引き分けた。

巻き返しを期した11月の第41回全日本女子学生優勝大会は初戦で高知工科大学に1−2で敗れた。うち1勝は、高木凜（体育4年）が4回生の維持を見せたが、反撃できなかった。

来季は関西女王奪回と全日本での上位進出がかかる。那須監督は「来季に向けた選手選考は、全員がゼロからのスタート。新星大体大に期待したい」と話している。

高木凜

来季につながる激闘

関西学生剣道優勝大会／全日本学生剣道優勝大会

剣道部男子は3大会連続優勝を目指した9月の第70回関西学生剣道優勝大会で準優勝。巻き返しを期した10月の第70回全日本学生剣道優勝大会は、3回戦で敗れたとはいえ、優勝した筑波大学と激闘を繰り広げた。

福家瑞寿輝

熊亮祐

男子 関西学生大会は準々決勝で関西福祉大学に5−1、準決勝も関西学院大に3−2で勝って近畿大学との決勝に進んだ。先鋒の瀧本翔太（体育4年）が面1本、次鋒の福家瑞寿輝（体育4年）が引き分け、五将の新垣光司（体育2年）が面2本。残り4人で2−0と大きくリードした。しかしその後2連敗し、副将の川頭泰輔（体育4年）が引き分けて2−2で大将戦に。5月の関西学生選手権で優勝した宮本翔太（体育4年）が一歩及ばず敗れ、3連覇を逃した。

「優勝しなければならない大会だった」と村上雷多監督。チームは巻き返しを全日本に誓った。

1回戦で北海学園大学に5−0、2回戦で関東学院大学に3−0で勝ち、3回戦は優勝候補の筑波大学。筑波大は後半の3選手は全国トップクラスだ。本学は前半に攻撃力重視のオーダーに変更し、先行逃げ切りを図った。

先鋒の瀧本が2本、次鋒の新垣が1本、五将の宮本が1本勝ちして3連勝。狙いは当たったかに見えたが、大将から4人目の中堅にシフトした川頭が粘りながらも敗れたのが誤算。三将の菊池金太郎（体育1年）が引き分け、副将の福家、大将の熊亮祐（体育4年）が敗れ3−3で代表者戦に。瀧本が敗れて3−0からの逆転負けを喫し、筑波大学は一気に頂点に駆け上がった。

村上監督は「学生は持っている実力を出し切った。敗因は、あと一本の勝負の厳しさを徹底できなかった私にある」。悔しい1敗は頂点を目指す来季に向けて大きな糧となる。

川頭泰輔

柔道部

ひたむきな4年生健闘　投げ技磨き、来季へ

関西学生体重別選手権大会

男子 8月にあった個人戦の第41回関西学生柔道体重別選手権大会。柔道部男子は、ベスト16進出4人にとどまり、全日本学生柔道体重別団体優勝大会（10月）の出場を逃した。

上田翼

河野沢水

生田秀和監督は「体調不良になる選手がいて、調整が難航した」と振り返る。

その中で66キロ級の永原月斗（体育2年）、73キロ級の河野沢水（体育1年）、81キロ級の上田翼（体育2年）、100キロ級の花崎凱阿（体育2年）がベスト16に進出した。

永原は柔らかい柔道で試合で地力を発揮でき、河野は投げ技があり、攻撃がしっかりできるバランスの取れた選手。上田は相四つの組手になると力強く、花崎は接近しての投げ技に力がある。それぞれ期待の下級生だ。

また、66キロ級の廣田智大（体育2年）は関西学生を欠場したが、昨年は1年生ながら準々決勝に進みインカレ出場を果たした。自分より大きな重量級の選手に対しての受けが良く、防御力に優れた選手だ。100キロ級の久々宮滉大（体育3年）も地力があり、新主将としてチームを引っ張る。

来季は、5月の団体戦、関西学生優勝大会で巻き返しを図る。生田監督は「ポイントを取らないと話にならない。まずは投げる力をつけること。さらにポイントを取られないための守りを鍛えたい」とレベルアップを誓っている。

加納怜治

久々宮滉大

関西学生体重別選手権大会

女子 柔道部女子は8月の第34回関西学生女子体重別選手権大会で成績は振るわず、全日本学生選手権への進出者が初めてゼロに。10月の全日本学生体重別団体優勝大会の出場も逃した。

辻野いづみ

谷崎未緒

森口志保

西村ひかる

その中で健闘したのが、48キロ級の谷崎未緒（体育4年）。それまでは控えに回ることが多かったが、ひたむきに練習に取り組んだ成果を出してベスト8に進出した。松田基子監督は「後輩たちが谷崎の試合を見て感じるところは多かったと思う」と評価する。

一方、9月の全日本ジュニア体重別選手権大会では、78キロ級の辻野いづみ（体育2年）、70キロ級の中本真奈美（体育1年）が奮闘。2人とも7月の近畿ジュニア体重別選手権大会で3位に入って出場権を獲得。中本は初戦で敗れたが、帝京平成大学の地力ある相手に指導2つまで追い込み、ゴールデンスコアにもつれ込む接戦。辻野は初戦を突破し、2回戦で環太平洋大学の強豪選手から指導、技ありを取って追い詰め、ラスト30秒で屈したが、内容のある試合。11月の湊谷杯では中本が優勝、辻野も準優勝した。

チームは9月、強豪の仙台大学で合宿をし、大いに刺激を受けたという。

松田監督は「来季は実力のある1年生が入学予定で、上級生には刺激になる。チーム内でいいライバル意識を持って競り合ってほしい」と話す。

バスケットボール部 女子

頂点へ 手応えの8強

関西女子学生バスケットボールリーグ／全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は、関西女子学生リーグ（1部）で4位。個人タイトルでは、大吉まな（体育4年）が優秀選手賞、得点王、3ポイント王、フリースロー王を受賞したが、チームとして勢いをつかめなかった。

西川奈津子

日髙ひかる

大吉まな

アンモールプリート・コール

村上なおみ監督は「リーグ終了時点で5連敗し、チームとしては最悪な状態だった」と反省したが、一方で「リーグ戦で日本一を目指すという気持ちを強く持ち、そこからやる事が明確になった」と12月の第74回全日本大学選手権大会に向けて、リーグ戦がバネになったと振り返る。

チームにとって、武庫川女子大学とのBチーム交流戦・フレンドリーマッチを11月に本学で開催したこともインカレに向けてチームの意識が一つになるいい機会となった。

また、第89回皇后杯全日本選手権大会の第2ラウンドで、Wリーグの東京羽田ヴィッキーズに敗れたものの88―90と接り合い、良い形で正念場の全日本インカレを迎えた。

インカレはBブロックリーグ初戦の日本福祉大学戦は少し硬かったが、終盤に粘り、90―72で勝利。翌日の北陸大学戦は80―37で快勝しトーナメントに進んだ。

1回戦は関西女子学生リーグで敗れた立命大学に84―76で勝利しリベンジ。2回戦も拓殖大学を79―72で降した。

準々決勝の相手は関東1位の白鷗大学。第3ピリオド終了まで50―50と互角に渡り合ったが、最後は63―75で敗れ、ベスト8で終えた。ただ、出場選手とスタンドの部員が一体となったチームは、応援が印象に残ったチームに贈られる「クリーン・ザ・ゲーム賞」を受賞した。

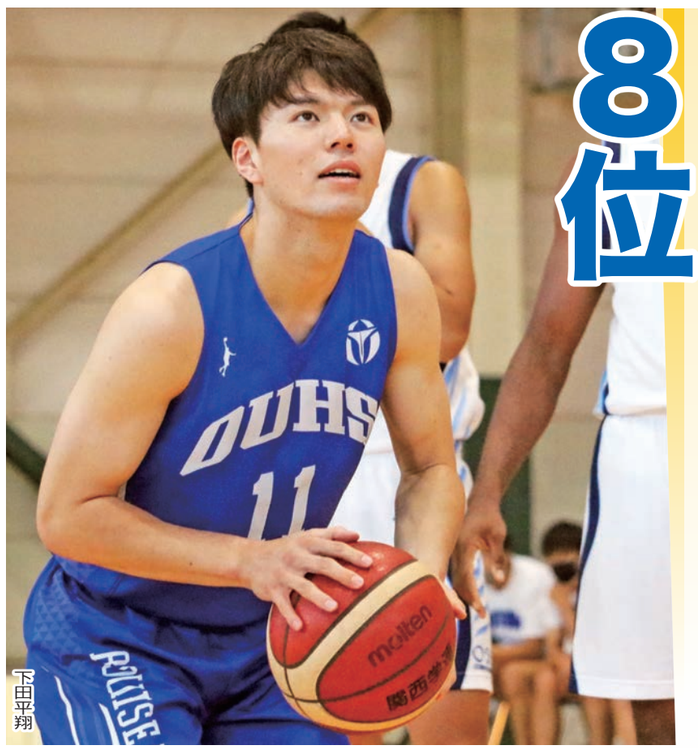
村上監督は「これまで戦ってきた全日本インカレとは違い、優勝が手の届くところに来たと感じた。今年は出場選手がほぼ4年生。決して強いチームではなかったが、一戦一戦大切に最後まで粘り強く戦うことが結果につながるということを4年生に教えてもらった」と振り返った。

バスケットボール部 男子

強豪倒すも 8位

関西学生バスケットボールリーグ戦

バスケットボール部男子は関西学生リーグでは8勝6敗で8位。最終戦で西日本王者の天理大学に勝利したものの、全日本大学選手権大会への出場は逃した。


下田平翔

6月の関西学生選手権大会では3回戦、続く西日本学生選手権大会でも4回戦で関西学院大学に敗退。リーグ戦はリベンジの気持ちをもって迎えた。

6勝6敗で迎えた第13戦、相手は連敗を喫している関西学院大学。苦しい時間帯が続いたが、2点差をつけられ試合終了かと思われた場面で、ポイントガードの請田祐哉（体育4年）が切れ味鋭いドリブルからのブザービートで同点。延長戦に持ち込んだ。

3点差をつけられ試合終了間際に、再び請田がぴったりと張り付いてくるディフェンスをかわし、ブザービートで決めの3ポイントシュートを決め再び延長戦に。再延長戦も両者譲らぬ攻防を展開し、試合時間残り0・1秒で、やはり請田が相手のファウルを誘い3本のフリースローを獲得。3本すべてのシュートをリングに沈めて77―76で試合終了。3度のブザービートで激闘を制し、リベンジを達成した。

請田祐哉

仲田泰利

里見龍平

最終戦の西日本王者・天理大学との一戦も粘りのあるディフェンスをみせ70―65で勝利。しかし、最終順位は8位でインカレ出場は逃した。

来季に向けて比嘉靖監督は「今シーズンの戦い方は間違ってはいなかった。精神的な部分でもっと強くならないと同じ結果になるので、日頃の練習から意識し強いチームを作り上げたい」と話した。

ダンス部

単独公演 盛況

800クリエイターズ　橋本 昇弥

ダンス部は11月、第47回となる単独公演を高石市のアプラたかいし（たかいし市民文化会館）で開催した。会場の450席はほぼ満席。これまではコロナ禍の影響で入場制限があり、盛況の中で開催できたのは3年ぶりだった。

800クリエイターズ　橋本 昇弥

800クリエイターズ　橋本 昇弥

800クリエイターズ　橋本 昇弥

公演では、ダンス部員15名のほか、ゲスト作品としてダンサーや教員として働くダンス部ＯＢＯＧの作品など全部で14作品が上演された。

公演のテーマは「to U―生きとし生けるものへ―」。緩急のあるエネルギッシュなパフォーマンスが繰り広げられ、舞台上から演者の息遣いが聞こえてきそうなハードな作品だ。白井麻子監督は「生物が死の直前まで力を尽くすことがテーマ。学生が自分たちを追い込み、踊りきったという点で良かった」と振り返る。

今回は、サッカー部男子部員約40名と共演。サッカー部員は10月から毎週、ダンス部と練習を重ね、両部員が「Fighting Spirits」を演じた。また、ダブルダッチ部によるロープパフォーマンスも会場を沸かせた。

ダンス部は8月の全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）で受賞を逃したが、9月の「アーティスティックムーブメント in TOYAMA 第25回少人数による創作ダンスコンクール」で2チームが出場。作品『dissonance』が特別賞を受賞した。

単独公演は今季の締めくくりとなり、両コンクールに出品した作品も演じられた。どの作品も学生が、白井監督やコーチ陣からアドバイスを得ながら自分で創作する。着想から完成まで数か月かかるという。

来季に向けた課題について、白井監督は「創作する上での着眼点など視点を広げていってほしい。イメージを膨らますことがダンスの技術にもつながる」と話している。

ラグビー部

A復帰ならず

関西大学ラグビーリーグ

4年ぶりのAリーグ復帰を目指したラグビー部。12月、京都市の宝が池公園球技場で行われた関西大学ラグビーリーグのA、Bリーグ入替戦でAリーグ7位の摂南大学と対戦したが、13―45で敗れ、復帰は果たせなかった。

林哲大

山本波琉

原透和

中井俊行監督は「1年間の中でのベストゲームだった」と振り返る。前半7分、自陣で相手の連続攻撃を低いタックルで食い止め、相手のパスをインタセプトし、フランカーの原透和（体育3年）が左サイドを独走して先制トライ。前半は相手の強力FWに対して前に出て低いタックルで応戦した。

後半は大差をつけられたが、岩本晃伸主将（体育4年）は「後半は相手のコンタクトの強さに押されたが、後輩たちは体を張ってよくボールについてきてくれた」と話す。

今季、中井部長が兼任で監督に就任。「学生スポーツであること」をもう一度見つめ直し、岩本主将を中心にグラウンドでより活発に意見を言い合えることを心掛けた。Bリーグでは5戦全勝（不戦勝1を含む）。2次上位トーナメント決勝は龍谷大学に25―27で敗れて2位となったが、2週間で立て直し、入替戦に臨んだ。

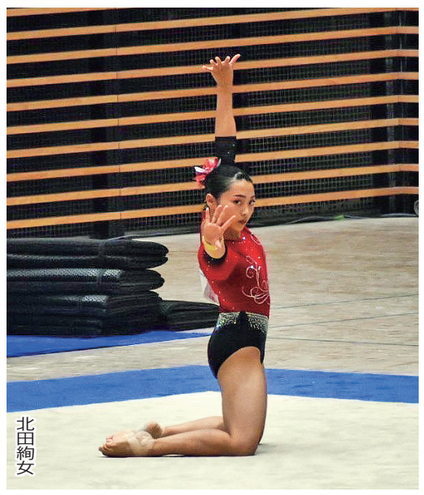
しかし、入替戦ではAリーグ勢のフィジカルの強さに及ばなかったのも事実だ。中井監督は「いいラグビーはできたが、強いラグビーではない。選手がサイズアップし体で張り合う勝負ができないと」。伝統の「ヘラクレス」復活が待たれる。

満身創痍も奮起

体操競技部

全日本学生体操競技選手権大会

前年はインカレ1部復帰、6年ぶりの全日本体操団体選手権出場と手応えを感じるシーズンとなった体操競技部女子。しかし2022年は相次ぐけがに苦しんだ。


北田絢女

女子　8月の第76回全日本学生体操競技選手権大会（三重）。大会の会場練習中に大野帆加（体育2年）が両膝を痛め、急きょ、1年生の加畑友里（体育）がメンバーに入った。加畑も和歌山北高校3年の時に膝の前十字靭帯を手術し、公式戦は約1年半ぶりの出場であった。

満身創痍のチーム状況の中でチームを引っ張ったのは、全日本個人総合選手権（4月）に出場し、関西インカレ（4月）で個人優勝、西日本インカレ（5月）で個人総合2位の北田絢女（体育2年）。ノーミスの演技で個人総合14位に入った。つま先までピンと伸ばした美しい演技が持ち味で試合に強い選手。平均台を得意とし、インカレでは平均台は11位と好位置につけ、跳馬も12位。段違い平行棒、ゆかも無難にまとめた。

前年のインカレ2部個人総合2位の北川莉奈（体育2年）はアキレス腱に不安を抱える中で32位、すねに不安があった同3位の吉田菜々花（体育3年）は42位。加畑も60位で、団体総合8位と何とか踏ん張った。

来季での巻き返しを目指し、現在、Dスコアの向上を目指し、技の難易度アップに取り組む。田原宏晃監督は「インカレはけがが相次いだ中で選手全員がよく踏ん張った。各選手のけがの回復次第だが、全日本団体出場への返り咲きと、関西学生選手権での2連覇を狙っていきたい」と話している。

史上最高5位

全日本学生体操競技選手権大会

第76回全日本学生体操競技選手権大会が8月に三重県で行われた。前年2部から1部に昇格した体操競技部男子は、団体総合で1991年以来31年ぶりとなる1部Aグループ入り（上位6校）、本学史上最高順位となる5位入賞を果たし、12月の第76回全日本体操団体選手権（福井県鯖江市）の出場権を初めて獲得した。

男子　躍進を支えたのが、築山翔馬（体育1年）、田部壮一郎（体育2年）の下級生コンビだ。

築山は種目別のゆかで、東京五輪個人総合金メダリストの橋本大輝（順天堂大学）と同点の14・566点で1位。跳馬も14・433点で8位入賞し、個人総合23位でチームを引っ張った。ゆかには絶対的な自信を持ち、5月のNHK杯にも本学選手として7年ぶりに出場。「ゆかは絶対に失敗しないという気持ちを持ち、試合に臨んでいる。オリンピックのゆかで金メダルを取りたい」と高い志を持つ。

田部は、個人総合では10位と築山をしのぐ。力技に自信があり、つり輪は14・366点で3位。練習に真摯に打ち込むひたむきさも大きな個性だ。ハンガリーでの種目別国際大会の日本代表派遣メンバーに選出され、つり輪で3位、平行棒で5位入賞。本学の学生が国際大会に出場するのは男子では初で、「ハンガリーではすごくいい経験ができた」と振り返る。

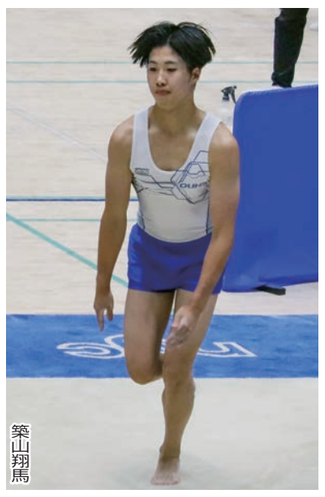
さらに、インカレまで主将を務めた藤島央基（体育4年）が個人総合32位と奮闘し、58位の齋藤蒼哉（体育2年）、67位の近江奎太（体育3年）もよく粘った。

チームは3年ぶりに開催された4月の関西学生選手権大会で団体総合優勝。5月の西日本学生選手権大会でも準優勝していた。藤原敏行監督は「西日本学生で久しぶりに表彰台に立てたことがいい励みになった」と話す。

ただ、初体験となった全日本団体選手権では課題も浮き彫りになった。トップ選手が集まる最高の舞台。経験の乏しさ。出場3選手のスコアがすべて得点となる、初めての6―3―3制で1つ1つの演技の重みはいっそう増し、プレッシャーがあったという。インカレでは本学が順位で上回った仙台大学、日本大学に及ばず、14位。それでも大舞台での演技は来季のインカレや選手強化に向けて貴重な経験となった。

来季に向けて、藤原監督は「簡単ではないが、表彰台は1つ目指すべきものだと思う。しかし、目標は選手がどう考えるかが重要」と話している。

田部壮一郎


築山翔馬

近江奎太

5連覇逃し我慢の年

なぎなた部

全日本学生なぎなた選手権大会 西日本学生なぎなた選手権大会

これまでインカレの演技で4連覇し全国の頂点に立っていたなぎなた部。しかし、2022年は部員数の減少を受けて我慢の年となった。

8月の第61回全日本学生選手権大会では、演技の部で河野葵（体育2年）・阿部真優（体育3年）が決勝で鹿屋体大に2―3と惜敗し、5連覇は果たせなかった。個人は阿部が3回戦で鹿屋体育大学の4年生に敗れ、剣道部からの応援を借りて臨んだ団体（5人制）も福岡大学に屈した。

部員は前年の6人から3人に減少。天川彰子監督は「メンバーが減り経験の浅さが出た。それでも演技は、河野は初のインカレだったがいい内容だった。個人も4年生の実力者相手に惜しい内容だった」と振り返る。

インカレで悔しい結果に終わり、部員が「次は絶対勝つ」と意気込んで臨んだ11月の西日本学生選手権大会。なぎなたは鹿屋体育大学、福岡大学、神戸松蔭女子学院大学など西日本に強豪大学が集中し、レベルの高さはインカレと変わらない。演技の部で河野・阿部が優勝、個人有段の部で阿部が優勝。団体の部（3人制）も河野、阿部と松木晃代（体育2年）が3位と健闘。阿部が出身県の兵庫県、河野が広島県の強化練習に加わり、部員不足のハンディを補うなど工夫しながら稽古した成果が出た。

来季は高校での実績のある1年生も数人加わる予定だという。天川監督は「在学生のレベルアップと新入生の強化を図り、部として目標に掲げるインカレ3冠を目指す」と話している。

アダプテッド・スポーツ部

ボッチャ

内田、快挙

ボッチャ世界選手権大会

ボッチャ世界選手権（12月、ブラジル・リオデジャネイロ）のBC4個人で、アダプテッド・スポーツ部の内田峻介（教育2年）が金メダルを獲得した。日本選手として世界選手権史上初優勝となる快挙だった。

内田は世界選手権初出場。「全員が格上だったのでチャレンジ精神を持って挑んだ」という。予選プールBの初戦で世界ランク2位の香港選手を破る「ジャイアントキリング」を果たし、3戦全勝で1位通過した。準々決勝でクロアチア選手に9―0、準決勝は韓国選手に6―2で勝利。決勝もコロンビア選手に7―0の大差をつけ、優勝が決まると涙を流した。「今まで練習してきたことが体現できた。アプローチが狙い通りで相手のコースをつぶすことができた。すべての技が決まるほど調子が良かった」と振り返る。

また、ペアでも唐司（とうのし）あみ選手（東洋大学）とともに出場し、予選プールCを2勝1敗で突破し、準々決勝でタイのペアに6―5で勝ち、ベスト4。メダルこそ逃したが、「世界との差がないことを体感でき、ペアでもメダルを狙いに行けると感じている」と手応えをつかんだ。

1月21～22日には日本選手権大会（愛知県豊田市）がある。パリパラリンピック出場に向けて負けられない戦いだ。「追われる立場になり、各選手は自分を倒しに来る。立場が変わっても挑戦する気持ちを忘れずに挑み、優勝したい」と意気込んでいる。